

第11回発表集会印象記

高岡市保健センター 熊谷 武夫

第11回富山県農村医学研究および健康管理活動発表会は1月29日13時30分から、降りしきる雪の中で、厚生連高岡病院地域医療研修室(1)を会場として開催されました。

開会の挨拶で厚生連の吉田会長は「農業の基盤が変貌して、婦人と老人の労働力に頼らざるを得ない状況の中で、疾病構造も変化して癌や心臓病が死因の上位を占めるにいたったが、今年度は高岡・滑川の検診センターで1万人の検診を実施できた。今後も検診事業を進めて疾病の早期発見・早期治療を目指したい。一方高齢者介護の問題も重要であるから、農協としてもヘルパーの養成に努めて行きたい」と話されました。

会長の越山先生は、「農業は危機的状態になっており、平成5年は凶作だった。日本文化は農耕民族の文化であり、農業の衰微は日本文化の衰退につながる。農業・農村を守る上にも農村医学を発展させなければならず、本研究集会の成果を期待している」と話されました。

13時50分から会員発表に入りましたが、まず富山市民病院の石田院長先生が座長席につかれて4題の発表がありました。

第1席は、厚生連滑川検診センター・岸栄さんの「人間ドックにおける血清脂質と食習慣との関連について」の発表でした。

平成4年度に日帰りドックを受診した5,310人を対象として、検診データと食習慣の関連を調べた結果を報告されましたが、聞き取りの基準が主観に左右されたため、予期した結果が得られず、問診内容を再検討した

いとのことでした。

厚生連高岡病院内科の亀谷先生は「脂質の分類が少ないためではないか」と指摘され、共同演者の小川先生は「分析の際に年齢を考慮すべきではなかったか」と話されました。

第2席は高岡検診センターの佐武千佳子さんが、「継続受診者の高脂血症の経過から保健相談をふりかえる」を報告されました。

これも日帰りドックを3年間連続して受診して高脂血症と指摘された725名について、検査データと食生活・運動状況・肥満度の相関関係を比較検討されたものでした。

しかし中性脂肪、総コレステロールの値の変化と食生活の関係については、肥満度、運動と同様にはっきりした相関は認められなかったそうです。

座長の石田先生は「データをとる基準を再検討してはどうか」と助言されました。

この2題は共に、保健指導の現場においては、たいへん重要な問題であり、農協組合員を含む国保加入者を対象に基本健康診査を行っている私にとっては興味深い演題でした。さらに検討を重ねてその成果を教えて戴きたいと思います。

第3席は「血中インスリン値と各種関連因子との関係について」で滑川病院の小川先生がお話になりました。

40~60才台の507人の空腹時血中インスリン値をRIA法で測定され、血中インスリン値が肥満度ともっとも強い相関を示し、空腹時血糖・中性脂肪・HDLコレステロールとも強い相関が認められたので、高インスリン

血症を糖尿病発症前の動脈硬化のリスクファクターの一つとして位置づけられると言われました。

先生はこれを検診項目の一つとして取り上げたいが、そのコストが高いのが難点であると話されました。

第4席の発表はケアホーム陽風の里の渡辺正男先生で「食生活スタイルと健康影響」を報告されました。

従来の国民栄養調査にのっとった調査方法では、個人個人の食生活指導に十分な資料が得られないと考えられた先生は、アンケート方式による食生活パターン分析の方法を考案され、女子短大生80名・老人病院の入院患者196名・病院の職員90名を対象にして調査された結果を述べられました。

そして短大生については、国民栄養調査方式で実施した調査結果と比較され、両者のパターンには大きな差異が認められたとされた上で、新方式の食生活パターン分析が食生活指導に有用で、かつ簡便・実用的であると結ばれました。

厚生連の大浦さんは、「実際の食品摂取量についての質問については男性では答えられる人が少ないのではないかと質問しておられました。

14時51分からは、渡辺正男先生が座長をされて3題の会員発表が続きました。

第5席では厚生連高岡病院形成外科の長谷田泰男先生が「農業機械による手の外傷の治療」について発表されました。

精米機・草刈り機・稲刈り機・牛糞絞り機によって負傷した40～50才台の4例について、臨床写真を提示されながら、形成外科の治療について話されました。

最近では、切断肢（指）の接合手術は可能で、欠損した組織の再建手術もできるが、予防に優る治療はなく、事故予防の指導・啓発、作業者の自覚をうながしたいと話されました。

大浦さんが、切断肢（指）の取り扱いにつ

いて質問されたのに対して、長谷田先生は「水道水で洗って、どんなに損傷がひどくてもあきらめずに持参して欲しい」とお答えになりました。

長谷田先生は農医研理事の長谷田祐作先生の御子息で、金沢医大の塚田先生のもとで形成外科を専攻され、高岡病院の初代の医長として活躍されています。

第6席は高岡病院の豊田務先生で、「利賀村におけるスギRAST成績」を発表されました。

山村である利賀村の住民検診の機会に368名の住民にスギRAST検査を実施されて、高岡検診センターを受診した499名の市街地・農村の居住者のそれと比較されて話されました。

利賀村のスギRAST陽性率は22.0%で、市街地住民の14.3%、農村住民の10.1%に比して高かったこと、山村と市街地・農村とでは、RAST陽性率と鼻アレルギー症状の発症率は逆相関を示したこと、利賀村の50才以上の女性の陽性率が低かったと報告されました。

豊田先生は、スギ花粉症の発症には炭水化合物等による大気汚染が関与していると考えられております。

第7席は第9回・第10回に引き続いて、富山医薬大の寺西先生が「富山県の空中花粉調査」を報告されました。

1992年はスギの花粉の飛散は少なかったようですが、1993年には多く飛散が観測されたとのことでした。

滑川病院の小川先生は花粉症の発生と杉の花粉の飛散状況と相関関係について質問されました。

高岡病院の豊田先生は、花粉の飛散する距離について、高さ200メートルで40～50キロメートルも飛ぶと言われました。

15時38分から特別発現として、越山先生が「老化とその対応」についてお話をなさいま

した。

先生は農協共済総合研究所の委託事業を日本農村医学会が受託するのを機会に、「老人学」を手がけたいと考えておられます。

金沢大学教授から東京都の老人医学研究所に移られた、故村上元孝先生にはじまる老年病学があり、国のゴールドプランもあるが、今の老人医学と老人の思いとがかけはなれているように思われるので、老人をとりまく諸問題を医学のみならず、社会科学の側面からも多角的に調査・研究して行きたいと話されました。

また先生は中国河南省との学术交流もされておられ、中国の老人の実態調査にも意欲を燃やしておられますので、その成果が期待されます。

16時03分からは高岡病院内科の亀谷先生が座長をされて、高岡病院の看護婦さんによる研究発表が続きました。

第8席の吉田さんは、「在宅療養患者のQOL向上を目指して」と題されて、脳梗塞に痴呆を合併した患者さんを訪問看護した症例について発表され、週1回・1時間、保健婦さんと同行して訪問看護を実施して、同時に介護にあっている家族にも助言・指導を行なった結果、約3カ月で本人の日常生活動作が改善したことから、在宅療養の場合は本人のみならず、家族のQOLについても視点を向けて援助したいと話されました。

現在、高岡市では老人保健福祉計画を策定中でして、その中で在宅介護にかかわる問題が議論されていますが、訪問保健指導と訪問看護はとりわけ重要な課題です。

病院の看護婦さんがこのテーマで研究をなさっておられることは、私にとってはたいへん心強く思われます。今後もぜひ研究成果を教えて戴きたいと思います。

9席の三井さんは、「高齢者の一過性精神

障害の発症因子を検討する」という題で発表されました。

63才から98才の4例について、手術後に精神障害をきたした際に、家族に理解を求めるためにパンフレットを作って活用しておられることを報告されました。

高齢者の手術が増える中で、看護の現場にもいろいろな問題が生じることを教えられましたが、この発表は痴呆性老人を家庭で介護しておられる家族にも、ぜひ教えて上げたいものだと思います。

貴重なご教示を戴きありがとうございます。

10席は般若さんの「糖尿病教育入院患者の退院後のコントロール状況について」でした。

通院を中断する患者が割合に多いこと、退院後1～2カ月で病状が悪化する人が4割もいることを報告され、食事療法の家族での実行の難しさを指摘されました。

高岡病院には、平成5年7月から患者さんの組織である糖尿病友の会が発足していることも紹介されました。

16時40分に越山先生の「熱心な討論に感銘した」とのご挨拶があり、集会は終わりました。

今回は久しぶりに雪のふりしきり中の集会でしたが、会員の皆様の熱心な研究発表が続いて盛会のうちに終わりました。

会場には、県厚生連・高岡病院・滑川病院・富山医薬大をはじめ多数の会員の方々が参加されていましたが、看護婦さんの発表が多かったためか、高岡病院の看護婦さんがいつもより多く出席されていました。

本集会が今後ますます発展されますことをお祈りしまして稿を終わります。

第11回集会をお世話下さいました厚生連の大浦さんをはじめ事務局の御苦勞に深謝します。

1994-01-31